

## 上野天神祭：歴史背景

上野天満宮は菅原神社としても知られており、400年以上も前に設立された。何世紀にもわたって、神社のさまざまなお祝いや行事の多くが組み合わせられ、今日のような上野天神祭りになったのである。現在の祭りは3つの部分から構成されており、移動可能な神社である神輿の行列、それに鬼の列と9組の「だんじり」が続く。日本の民間伝承では、鬼は西洋の鬼や悪魔に似ており、多くの場合自然の力を表している。

鬼の列は2つの部分から構成されている。1つ目は役行者の行列で、伊賀の領主藤堂高虎（1556-1630）が目の病から奇跡的に回復した後、祭りに含まれた。領民たちは彼らの領主が病気であると聞き、修験道の聖地大峰山（1,719 m）へ彼の回復を祈るために巡礼をした。高虎は病から回復した時、感謝の気持ちとして貴重な能面を巡礼者たちに与えた。領主の回復を祝って、町の人々は能面を被り、大峰山への巡礼を模した行列を始めた。

この伝統は、伝統的な修験道の創始者であり、伝説の行者、役小角（634-706）を参考にして、役行者行列として知られるようになった。現在、町の人々は17世紀の元の能面を真似た精密な複製品を着用している。

鬼行列の第二部は、多くの物語で邪悪な鬼を退治したとして語り継がれている武士、鎮西八郎為朝（1139-1170）にちなんで名付けられた。18世紀後半、為朝の行列は、役行者列とともに、上野天神祭りに組み込まれた。行列は、激しい戦いの後、為朝が意気揚々と帰還する情景を描いている。

行列の最後に来る9組の「だんじり」と「しるし」は、それぞれ伊賀の町を代表している。小さな「しるし」には、それぞれの町のシンボルが飾られている。大きな車輪の付いた木製の「だんじり」が「しるし」に続き、山車の中ではお囃子が奏でられ、それぞれ町内の住民によって曳行される。